

ディリー・ジーザス・ニュース #209

イエスの宣教

イエスの失われた息子のたとえ話

ルカ15.11-24

11 イエスは続けました。 「ある男に二人の息子がいました。 12 弟は父に言いました。『お父様、財産の分け前をください。』そこで父は財産を二人で分けました。

13 「それから間もなく、弟は全財産をまとめて遠い国へ旅立ち、そこで無謀な生活で財産を浪費しました。 14 彼がすべてを使い果たした後、その国全体にひどい飢饉が起り、彼は絶えずひどい困窮に陥りました。 15 そこで彼は行つて、その地方の住民のところに雇われ、その人は彼を畠に遣わして豚の世話をさせました。 16 彼は豚が食べている豆の鞘で腹を満たしたいとずっと願っていましたが、誰も彼に何も与えてくれませんでした。

17 彼は我に返つて言った。「父の雇い人の中には、食べ物に困らない者が何人もいるのに、私はここで飢え死にしそうだ。 18 私はここから立ち上がり父のところへ戻り、こう言おう。『父よ、私は天に対してもあなたに対しても罪を犯しました。 19 もう、わたしはあなたの息子として扱われる資格はありません。どうか、わたしをあなたの雇い人の一人のように扱ってください。』」

20 「そこで彼は立ち上がり、父のもとへ戻りました。

「しかし、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけ、深く憐れんで、走り寄って息子を抱きしめ、口づけしました。

21 「息子は父に言いました。『父よ、私は天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。もうあなたの息子として扱われる資格はありません…』」

22 しかし父親は押し入つて来て、召使いたちに言いました。『急いで、一番良い着物を持って来て、彼に着せなさい。指輪を指にはめ、足には履物を履かせなさい。 23 肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。宴を開いて祝おう。 24 この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのです』。そこで彼らは祝い始めた。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ =^{MT}、マーク=^M、ルカ =^L、ヨハネ =^J、使徒行伝 =^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、赤いイタリック体はイエスの言葉を示します。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	ペレアのどこか
タイムライン	1月または2月（36ヶ月目と37ヶ月目）

ディリー・ジーザス・ニュース #209

イエスの生涯の文脈	第7段階：ペレアにおけるイエスの宣教
	A.ペレア全土におけるイエスの奉仕者たち
タイトル	8. イエスの失われた息子のたとえ話

コメント：

今日の朗読は、イエスのたとえ話の中でも最も有名なものかもしれません。イエスは、二人の息子を持つ一人の父親に焦点を絞りました。この箇所は、父親と弟の関係を扱っています。（このたとえ話のクライマックスは、実は結末、つまり兄と父親の関係にあります。それは明日の朗読です。）

物語の冒頭、弟は渋々実家で暮らしていたものの、父親との関係においては実際には「死んだ」状態だった。彼が父親のもとへ行き、前払いで遺産を要求した様子からも、それは明らかだった。

イエスの時代の文化では、現代と同様に、子供たちは両親の死後に遺産を受け取りました。父親の死後に自分に与えられるべきものを要求することで、息子は父親が自分にとって既に死んだも同然であると告げていたのです。父親との生活に一切関わりたくないのです。この要求は、息子が父親に与え得る最も激しい拒絶でした。

そのさらなる証拠は、若者が新たに得た財産を蓄え、すぐに父親から金銭の許す限り遠くへ逃げ出した時に明らかになった。幼い息子の心の中の父親に対する大きな距離は、二人を隔てるこの物理的な空間に反映されていた。

この父親は、息子が最初に強く拒絶したからといって諦めるのではなく、無条件に息子を愛していた。息子が再び自分との関係を選ぶ唯一の方法は、父親への必要性と欲求を自ら理解することだと父親は知っていた。無責任な息子が無分別で無駄な生活にすべてを費やしてしまうことを十分に承知した上で、遺産を前もって息子に譲ろうとしたことは、父親の知恵と愛情の表れだった。息子に「自分を見つける」機会を与え、再び息子と繋がる機会を与えるためなら、すべてを犠牲にする覚悟があったのだ。

これは、最初の二つのたとえ話と三番目のたとえ話の重要な違いの一つを示しています。最初の二つのたとえ話では、持ち主は失くしたものを「見つけ」、返すために必要なことはすべて行いました。羊と銀貨は、ただ見つかるのを待っていました。

しかし、人と神との愛の関係は、双方の選択と献身を必要とします。私たちは「我に返って」神の慈しみと恵みを認識し、そして私たち自身も悔い改めて神のもとへ行き、赦しと新たなスタートを求めなければならないことを認識しなければなりません。私たちは「立ち上がり、神のもとへ帰る」ことを選ばなければなりません。なぜなら、神が私たちを愛し、待ち望んでくださっているにもかかわらず、私たちが神を見捨ててしまふからです。

放蕩息子は、自らの愚かな決断がもたらした結果が、彼に大きな衝撃を与えた時、二つの重大な事実に気づきました。まず、父親についてあることに気づきました。父親は信じられないほど善良で慈悲深い人だった

ディリー・ジーザス・ニュース #209

のです。父親の雇い人でさえ、父親の人柄のおかげで豊かな恵みを受けていました。父親が毎日見張り台に立って、愛する息子がその日に帰ってくるかどうか見張っていたとは、息子は知る由もありませんでした。

放蕩息子は、自分自身について重大なことを悟りました。それは、自分が罪深い人間だったということです。父親と、そして神との関係を裏切っていたのです。彼を定義づけていたのは、信じられないほど善良で、寛大で、慈悲深い父親がいたという事実でした。そのような素晴らしい父親の息子として、彼は父親の誇りとなるべきでした。しかし、彼は父親にとって恥辱となる存在となってしまったのです。

今、彼にできることは、自ら父のもとへ戻り、許しを請い、もう息子ではなく雇われ人として扱ってほしいと頼むことだけだった。父の偉大さゆえに、自分の人生を自分で切り開こうとするよりも、父のために働く方がずっと楽だった。

放蕩息子は、同じように悔い改めの精神で絶えずイエスのもとにやって来た「**取税人や罪深い人々**」の態度を如実に示していました。彼らもまた「我に返って」、自分たちが全く罪深い者であることに気づきました。それは単に人々からそう判断されたからではなく、神の御前で真の自分を見つめたからです。彼らは、神が温かく迎え入れて、完全な交わりと、御子イエスのあらゆる豊かさを与えてくださることを知る必要がありました。

放蕩息子が告白を始めたものの、雇われ人になりたいと頼む前に、父親が息子としての完全な回復を宣言して彼を遮ったことにお気づきでしょうか。実際、放蕩息子は以前実家で暮らしていたものの、当時は父親にとって「死んだ」存在でした。今、悔い改めた心で父親の眞の善良さと偉大さを知り、人生で初めて父親との愛の関係において「生き返った」のです。これは父親にとって、絶え間ない祝福と歓喜の理由となりました。

応用：

悔い改めは神のためではなく、私たちのために重要です。私たちが悔い改めたからといって、神の私たちへの愛と慈しみが変わることはありません。神は常に同じです。神の慈しみの光に照らして、私たちの罪深さをありのままに認めるべきなのは私たち自身です。罪に囚われた状態から立ち上がり、神のもとへ行き、赦しと、神がすでに私たちのために用意してくださった祝宴の恵みのすべてへの完全な回復を求めるべきなのは私たち自身です。

神は私たちの悔い改めた心を喜ばれます。私たちもそうあるべきです。神と再び繋がることこそ、この地上における最大の喜びの源です。これに匹敵するものは何もありません。悔い改めが私たち自身のものであれ、他人のものであれ、悔い改めに対して喜ぶことこそが唯一正しい態度です。これが神の態度であるならば、私たちもそうあるべきです。

あなたの帰還に対する神の温かい歓迎と祝福に対するあなたの喜びはいかがですか。

あなたは、自分と同じような放蕩息子たちが神のもとに帰つてくることを、どの程度喜んでいますか。

あなたの喜びの状態について何をする必要がありますか？